

IV 本県に被害を及ぼした主な災害

1 文政11年（1828年）^ね子年の大風（通称：シーボルト台風）

○文政11年8月9～10日（1828年9月17～18日）

北部九州に史上最大といわれる被害をもたらした台風。シーボルト事件発覚の端緒となったという説からシーボルト台風ともいわれる。

元佐賀地方気象台の小西達男氏の論文「1828年シーボルト台風（子年の大風）と高潮」（2010年6月 日本気象学会）によると、佐賀藩の被害は、死者数が8,200～10,600人で当時の人口を36万～37万人とすると死亡率が2～3%、全壊家屋が35,000～42,000軒、建物の全壊率が約50%と推定されている。台風は、西彼杵半島に上陸し、佐賀市北部を通して北部九州を縦断。中心気圧は935hPa程度、最大風速は55m程度と推定されている。

鍋島直正公伝によると、「11年戌子、8月9日の夜、大台風襲来し、豪雨のため山嘯海嘯併せ起り、肥前領内至る処の山谷海浜を蕩壊し、家屋樹木を吹倒したり。佐嘉城下にては、八丁馬場の町家を将棋倒しにして一字を余さず、伊勢町は僅に3戸



暴風で倒壊した鳥居の残骸（嬉野市 川上丹生神社）

の立屋あるのみにて、比較的倒家少なきは唯白山町付近のみ、城堀4面の樹木は枯草を拉ぐが如く、白陽軒の森は堰伏せられて二の丸の殿屋露出し、会所小路より之を望見すべし、南里村の一農婦は其抱きたる嬰兒を吹飛ばされしが夜明けて見れば、該児は3間余の川向いに絶命し居たりと、以て其風力の猛烈なるを例知すべしと、」さらにその被害については、田畑（水下）7,071町5段余、



大火後の家が建ち並ぶ有田内山の町並み

（汐下）8,307町9段余、（砂下）3,765町4段余、潰屋35,364軒、半潰屋21,507軒、流家1,512軒、焼失家1,647軒、死者10,283人（溺死2,266人、横死7,901人、焼死115人）の被害があったと記されている。（佐賀県災異誌「鍋島直正公伝」）（S39, 4, 30 佐賀県防災課発行）

この台風による高潮の被害は甚大で前出の小西氏の論文によれば、佐賀藩

では、江戸時代に行われた全干拓面積に相当もしくは超える被害の大きさであると推定されている。

また、有田町では暴風のため破壊された岩谷川内の素焼き窯の火が燃え広がり、当時、有田千軒と呼ばれた内山の町並みをほとんど焼き尽くす有田大火と呼ばれる惨事となり、さらに川は大洪水となり逃げ場もなかったと伝えられている。

2 明治26年台風（己^きの年の風）

○明治26年（1893）10月14日

「佐賀県災異誌」（佐賀県防災課発行）によれば、「11日より鹿児島附近にあ



西川副村の犠牲者を供養する弔魂碣（行楽寺）

った低気圧は13日午後10時に於て748耗を示せしを以て直径凡そ50里に對し気圧の経度が8で是が暴風を起こした」とあり、さらに、その被害は、「住家全壊4,830棟、難破船268隻、漂流漁民823人うち、生存者651人、溺死者46人、生死不明128人」「佐賀市の最低気圧989.6耗、最大風速22.6m（14日）」（佐賀県災

異誌「佐賀新聞」とのことである。

3 大正3年高潮

○大正3年（1914年）8月25日

「佐賀県災異誌」によると、「8月中旬マリアナ沖に発生した低気圧は台風となり、25日朝、長崎付近を通過し佐賀・福岡をかすめるように対馬海峡を通り日本海に抜けた。佐賀においては、25日14時に973.5mb（hPa）の最低気圧を観測。最大風速は南の風23.9m/s、24日から26日までの総雨量は147.8mmとなった。この被害夥しく稀有の高潮に見舞われ杵島、藤津、小城、佐賀の有明海沿岸の各海岸堤防六角川、塩田川其の他の河川堤防の殆んどが決潰し、潮水侵入大海原と化し、田畑の被害5000町歩、家屋浸水5000戸、農作物は云うに及ばず、道路、橋梁、船舶、人畜の被害も又莫大な数字に上る。」（佐賀県災異誌「佐賀新聞」とあり、また、「大正3年8月25日、有明海沿岸一帯は、大津浪の為め惨々に荒らされたが、就中杵島郡の海岸は特に激甚であった。柳



潮塞観音（白石町福富）

も此の杵島郡の海岸線は約 8 0 0 0 間あるが、その海岸線が殆ど残らず決潰せられた上、内側に繞らす幾重もの旧堤塘迄が、概ね破損して。是等堤塘の総延長は、実に 2 2 2 6 6 間に及び、堤塘内部の人家田畠の荒廃は勿論のこと、人畜の死傷さへあった」と記されている。(佐賀県災異誌「佐賀県干拓史」)

4 大正 8 年高潮

○大正 8 年(1919) 8 月 15, 16 日

8 月 7 日マリアナ附近に発生した熱帯性低気圧は西に進み、后次第に北西に進路を変え、13 日那覇の東方を通過 15 日屋久島の西方海上を経 16 日朝五島列島の東岸に接近し 730 耗を示し、更に九州西岸を北東進して 16 日 12 時対馬海峡



大正 8 年の高潮で荒廃した捌を開墾した記念碑(白石町福富)

に入り夕刻日本海に去る。有明海沿岸は恰も満潮時に際し高潮来襲し、鹿島郡、佐賀郡、小城郡、藤津郡の沿岸堤防各所で決潰潮水侵入し、又城原川堤防も各所で破損、農作物は云うに及ばず、道路、家屋其の他甚大の損害を被れり。(佐賀県災異誌「佐賀新聞」)とある。

「福富町誌(続編)」(H4, 11, 30 福富町誌編さん委員会)に掲載されている「福富村郷土誌」によれば、「大正三年高潮被害の復旧工事漸く竣へたるのみにて、未だ作物の収穫も充分収むること能はざるに、大正八年八月十六日又々高潮来襲し、二等堤防以外の新開地は全部海水侵入し、三等堤防破壊の惨状、恰も大正三年の惨害と異らず、百七十町歩余は収穫皆無となり、住ノ江海岸通り侵入

床上に及び混雑少なからず」と記されている。大正 3 年に続く高潮被害のため多くの干拓地(捌)が経営困難となり、手放されたり「破れ捌」として放置されたりした。

5 大正 15 年水害

○大正 15 年(1926 年) 9 月 7 日

7 日午前 0 時頃から降り出した豪雨は短時間に引っきりなしに降り続いたために各地至る所の河川氾濫し、人畜の死亡、田畑家屋の浸水や堤防の決潰橋梁の流失したるもの少なからず其の被害ヶ所は県下西部方面の藤津、杵島、西松浦及び東松浦方面中でも藤津郡五町田村一帯は最も悲惨を極めた。

(藤津郡) 塩田川氾濫し 5 ケ所延 7 2 間決潰し 5 0 0 戸、水田 4 5 0 町歩浸水 橋梁流失 1 2 ケ所 山崖崩壊 1 3 ケ所、6 名死亡、家屋 2 倒壊

(杵島郡) 武雄付近の河川氾濫し橘村一帯では920戸、水田1000町歩以上浸水、潮見川堤防3ヶ所決潰、道路も殆どが浸水 橋梁流失2ヶ所

その他、西松浦郡、東松浦郡北波多村、相知村、小城郡小城町、芦刈方面、東多久村、神埼郡、佐賀郡で被害があった。

大正15年9月6日から7日にかけての雨量は、次のとおり。嬉野230mm、武雄208mm、鹿島174.8mm（佐賀県災異誌「佐賀新聞」）

6 昭和20年枕崎台風

○昭和20年（1945年）9月17日

「佐賀県災異誌」によれば、「比島洋上にあった台風は17日沖縄の東側を通り、毎時50～60キロの速度で北上し鹿児島に上陸、宮崎を通り瀬戸内海を荒し近畿を横断して日本海に出、能登半島を経て酒田附近より奥羽を横断して宮古附近より太平洋に出る。佐賀地方は9月17日5時より次第に風速を増し、北北東より漸次北に廻り北北西より北西に逆転21時頃18メートル8を測り、瞬間最大は29メートルとなる。以後次第に衰え、18日午前風雨共に弱くなり天候回復す。県内の雨量は、三瀬地方の北部県界は500mm以上、東松浦入野方面も300mmを超え、平坦部は割合少なく100mm内外であった。

佐賀、神埼、三養基郡の北部、小城郡下では河川氾濫し、堤防随所に決潰、一部では泥海と化し、水稻は勿論、時蔬菜類の被害大、又玄海、有明海方面では風害のため水産、船舶に大なる被害あり」と記されている。（佐賀県災異誌）

また、「大和町史」（S 50, 11.3）によれば、「大和町一帯は風害よりもむしろ水害による大被害を受けた。（中略）荒れ狂った濁流は流木を伴い、下流の平田橋でせき止められ、井関の作用をしたためついに平田堤防が決壊した。押し流された平田橋は決壊個所より流入して付近の住宅をなぎ払った形で、住家九戸と二十人の生命を一瞬にして奪い去ったのである。時は十七日午後九時ごろで平田部落は泥海と化した。」と当時の惨状を記している。



二十菩薩の碑（大和町平田地区）

7 昭和23年水害

○昭和23年（1948年）9月11日～12日

ハーゼル台風の残骸が台湾付近から北上して9月8日朝鮮南部を通過した際は、大した降雨はなかったが9日台湾海峡に発生した弱い低気圧が10日午後北東に進んで東シナ海を通り11日朝鮮海峡に達するに及んで、この低気圧から南西に伸びる顕著な不連続線のため、11日夕刻から12日早暁にかけて福岡県の糸島、佐賀県の東松浦、西松浦の山岳地帯から佐世保、早岐一帯に豪雨を降らし長崎、佐賀県下に大被害を起こした。

（9月10日～12日 総降水量）

佐賀267.9mm 鳥栖198.0mm

北多久234.8mm 相知125.2mm

嬉野254.3mm

（被害）

死者・行方不明者

小城1 東松浦21

杵島1 西松浦64

藤津1 計88人

家屋倒壊 佐賀2 小城31 東松浦12 西松浦

191 杵島19 藤津1 計256戸

家屋流失 佐賀1 小城4 東松浦30 西松浦

156 杵島6 計197戸



大洪水記念碑（伊万里市大川町）



S23 9出水 松浦川中流 和田山橋



S23 9出水 松浦川下流 牟田部

写真：国土交通省武雄河川事務所

家屋浸水22, 720戸 橋梁流失・破損516 田畑流失・埋没992.4町（佐賀県災異誌「佐賀新聞」）

8 昭和24年ジュディス台風 水害

○昭和24年（1949年）8月16日～19日

「佐賀市史 第1巻」（S52, 7, 29）によると、「八月十五日二十一時九州南部に上陸した九六〇ミリバールのジュディス台風は、にわかに進路を西にとって九州を縦断して玄界灘にぬけたが、太平洋と大陸にある高気圧に禍いされて速度極めて緩慢となり、佐賀県では十六日昼夜にわたって風雨ともに猛威をふるった。」とあり、「大和町史」（S 50, 11.3）では、「十六日朝より豪雨をもたらし、夜に入ってますます峻烈を極め、ついに空前の豪雨となった。（中略）川上川はこれまた空前の大増水となり、十七日午前三時には平田堤防が二百メートルにわたって決壊し、更に午前五時ごろ芦刈川分岐点、一の井樋付近が二百メ



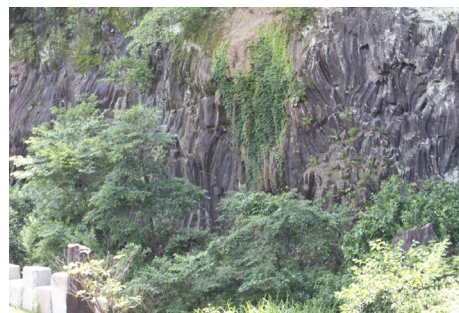
大和町平野の水害復旧記念碑

一トルほど決壊して堤防下の家屋を押し流し、旧川上村南部のほぼ三分の二を濁流に包み、水深は床上二メートルに達し、三日月村との境を沈めて一面の泥海と化し、村周囲の橋はことごとく流失、電話は不通となって完全な孤立状態に至った。」と当時の惨状を記している。「佐賀県災異誌」には「8月15日21時九州南端に上陸したジュデス台風は予想を裏切って西にカーブし鹿児島、熊本の縦断コースをとった後玄界灘にぬけたが、太平洋と大陸の高気圧配置に禍いされて極めて緩慢となり本県では15日夜半より台風の先駆が襲来し16日未明より豪雨を

伴い昼夜に亘って降雨があった。」と記されている。(佐賀県災異誌「佐賀新聞」)

9 昭和26年西分地すべり、昭和32年西大久保地すべり

伊万里市を含む北松浦半島は、別名北松地すべり地帯とも呼ばれている。その特徴は、海底で堆積した「第三紀層」といわれる炭層を含む地層とその上の凝灰岩などの火山性堆積物や礫層、それを帽子のように覆う玄武岩（キャップロックとも呼ばれる）の台地など複雑な地層構成にあるといわれる。玄武岩は急激に冷やされると柱状節理と呼ばれる柱状の深い割れ目ができる。ここに降った雨は割れ目を通り下部の比較的柔らかい層にたまってすべり面となり地すべりを引き起こすということである。



玄武岩の柱状節理の地層（佐世保市吉井町）

地すべりの態様も様々で、人形石山の北に連なる石倉山で昭和27年10月に発生した地すべりでは、地面が動いている最中にもかかわらず、田んぼで稲刈りが行われたと伝わる一方、昭和26年、32年と人形石山の東側で発生した地すべりは、山頂部から地割れ崩壊する型で、大音響とともに山が崩壊し、多数の死者、行方不明者、家屋の倒壊、田畑の埋没を引き起こしたと伝わる。

○西分地すべり 昭和26年（1951年）2月16日～18日

西松浦郡山代町西分乙女郷の人形（石）山中腹が物凄い地鳴りと共に崩壊を始め山の中心から噴き出した泥水を伴って山津波となり山脚の乙女部落を全滅させた。（16日～18日の被害）倒壊家屋27戸 解体家屋103戸 被害面積60町 行方不明3名 罹災者123名（佐賀県災異誌「佐賀新聞」）

このときの様子を「伊万里市史」は、「十六日朝六時半頃、雷鳴に似た音響が

したので部落の人々はまた雨が降り出したと思っていたら、岩塊がゴロゴロ押し寄せてきた。家屋は押し潰され、転落してゆく（中略）かくて流土は二十二戸を押し潰し、更に猛進する流土は佐用川流域の階段式水田を埋め、午前七時半頃には西分公民館にあと一〇〇mの距離に迫った。」「乙女部落の五戸は十六日の昼まで無事であった。が、翌十七日午前三時半ごろ、山頂から崩れ落ちる石が「ゴーゴー」と鳴りながら回転して月光の下で火花を散らす凄惨な光景であった。このとき崩壊した岩塊は流土とともに乙女部落をおそい、家屋はマッチ箱を押し潰すように消えていった。」と伝えている。

○西大久保地すべり 昭和32年（1957年）7月6日

6日15時55分ごろ伊万里市山代町西大久保部落西側の人形石山（427m）の8合目、約350mの地点から、幅250m長さ650mにわたって、大音響とともに山崩れを起こし、約3万m³（6万トン）の土砂がもうもうたる



人形石山地に遭難者慰霊塔

土煙をあげて、山麓の部落に押しかぶり、一瞬のうちに13戸が岩や土砂の下に埋められ、死者1名、重症1名、行方不明6名を出した。

去る1日から降り続いた雨のため地割れが出来、さらに5日夜には落差10cm、長さ10mに広がり、同夜は7世帯31人が避難していたが、6日には雨も小降りとなり、安心して帰った昼間に此の大崩壊に襲われたもの。

現場は去る昭和26年2月の地すべり地点より左の方に少し上流に上った所で、昭和26年の幅800m、奥行き1000mに比べて規模は小さかったが、急激にすべったので、犠牲者は多かった。佐代川はせき止められて、付近水田に水があ

ふれ、7日朝新たに50m上の方で地すべりを起こし土砂が崩れ落ち、また頂上付近には延長150m、幅30cmの地割れが出来て危険となり、遺体発掘作業は困難を極めている。県警本部の集計によれば死者（行方不明者を含む）7名、重症1名、住家全壊（埋没）13戸、非住家（公民館を含む）7棟、田の埋没5町2反歩、山林4町1反歩が崩壊し、スギなど多数の立木を埋めた他、牛7頭をはじめ鶏などの家畜もことごとく失った。（佐賀県災異誌）

10 昭和28年（1953年）水害 （通称：28水）

○6月25日～28日

「佐賀県災異誌」によると、24日午後から25日早朝にかけて、満州から

華中方面へ南西にのびる気圧の谷がしだいに深まり、山東半島の南に998mbの低気圧を伴って接近したため、梅雨前線が北上し、佐賀地方は25日朝から雨となった。

1 この雨は午後からますます強くなり、夜半まで激しく降り続いた。この強雨を第1波として、26日朝から昼ごろまで再び第2波の激しい強雨が襲い、佐賀では6時48分から7時48分までの1時間に72.



写真：国土交通省武雄河川事務所

3mmの雨量を観測した。26日昼ごろまでにすでに400mmの大雨となつて、被害は全県下にわたって大きくなっていったところに、27日朝から夜にかけて第3波の強雨に襲われ、さらに100mmの雨が加わったため、近年の史上に見られぬ大災害となった。しかし、28日午後には前線もようやく南九州まで南下して活動も弱まった。

2 この雨は梅雨前線が九州の北部と中部の間、幅100km位の狭い地域内で、北上、南下をたびたびくり返し（振動）ながら活発に活動したためで、大雨の区域も佐賀、福岡、長崎各県からしだいに熊本、大分県におよび、これら各県、とくに佐賀、福岡、熊本県では壊滅的な災害をひき起こした。



写真：国土交通省武雄河川事務所

強い雨の波は、前線の北側およそ50km幅で、雷を伴って現れており、第1波は佐賀市を中心とした平坦部が多く、170～180mm前後であつたが第2波は三瀬を中心とする山間部がやや多く、やはり180mm前後の雨があり、また第3波は佐賀で100mm程度であつたのに対し、三瀬では150mm、さらに 28日早朝か

ら夜にかけて、佐賀では小雨が断続した程度であつたが、県の北西部や三瀬、古湯を中心とする山間部では150～200mmの大雨が降った。

この4日間の雨量は、鹿島、嬉野地方でやや少なく500mmを割つたが、その他の平坦部では600mm、古湯、三瀬などの山間部では900mmで、1年間の雨量の半分に近く、想像を絶する量であつた。このため県下の主な河川、松浦、嘉瀬、牛津、六角、塩田、城原、田手、大木川などは、25日夜半から26日朝までに、いたる所で、相ついで堤防が決壊、また筑後川は佐賀県側には完全決壊は1カ所もなかったが、上流の熊本県小国地方一帯は、この豪雨の最多雨地帯であつたため、異常に増水した水が、各支川に逆流して、嘉瀬川、城原川、田手川などからはんらんした泥水と合流し、筑後川流域と佐賀平

坦部は、文字どおり一面の泥海化した。

また東松浦郡、小城郡、杵島郡下には、各地に地すべりが発生し、とくに切木村瓜坂では一瞬にして9戸が埋没、死傷者35名を出すという惨事を引き起こした。嘉瀬川の決壊によって東側の鍋島、嘉瀬村は約1カ月も水がひかず、水没したままであり、また筑後川沿いの旭村下野部落も1カ月以上濁水の中につかったままであった。(佐賀県災異誌)



水害復旧記念之碑（鳥栖市酒井東町）

11 昭和34年（1959年）高潮（宮古島台風）

○昭和34年9月16日～17日

9月12にグアム島付近で発生した台風14号は、発達しながら西北西に進み、非常に強い勢力で15日19時頃宮古島を通過した。その後は東シナ海から対馬海峡、日本海を通り、18日夜半には宗谷海峡付近を通過、19日9時には温帯低気圧に変わった。宮古島では際低気圧908.1hPa、最大風速53.0m/s（最大瞬間風速64.8m/sを観測し、島の7割の家屋が倒壊した。（気象庁HPより）なお、気象庁のデータでは、佐賀市の最低海面気圧は17日で990.6hPa、最大風速は19.3m/s、最大瞬間風速は30.8m/sと記録されている。

「佐賀県災異誌」によれば、17日はちょうど旧暦8月15日の大潮にあたり



有明海岸直轄事業30周年記念碑（佐賀市東与賀）

その上台風が最も接近した時と有明海の満潮時（住ノ江9時30分）が重なったため、有明海沿岸では6m以上の高潮に襲われ干拓、海岸堤防は12カ所にわたって決壊した。このためさる昭和31年の9号、12号の高潮による災害復旧が昨年ようやく終わって再建の途についたばかりの干拓地体は、再び一面のどろ海の中に没し

てしまうという大きな災害となったと記されている。

被災状況では、干拓、海岸堤防で、有明海の干拓、海岸堤防は12か所で決壊、福富村昭和堀100m、同大福堀150m、久保田村久保田堀25m、江北町天神堀20m、有明村築切堀30m、川副町天治堀30m、芦刈村社堀20m、佐賀市巨勢町新地堀20m、同嘉瀬町大野堀15m、東与賀村大授堀40m、川副町戊申堀20m、鹿島市七浦干拓15mの被害であった。

12 昭和37年（1962年）水害 （通称：七・八災害）

○昭和37年7月8日

「佐賀県災異誌」によれば、「6日夕刻より九州南方海上に南下していた梅雨前線は7日上海付近の波動性低気圧の接近にともない北上活発化し7日夜半より8日早朝にかけて県下全域に豪雨をもたらした。ときに鹿島・大浦・武雄地区では、太良町大浦の8日2時から8時までの7時間雨量604mmをトップに200mm以上の集中豪雨となりこの豪雨は1日から6日までの連続豪雨と相重なってその威力を倍加し、道路や堤防はズタズタに寸断され、山津波や土砂の埋没で死者34人、行方不明27人の被害者を出したことは、佐賀県災害史上における二番目の大災害となった。最も災害のひどかった藤津郡太良町の



慰霊塔（太良町大浦）

大浦地区で、山津波のため数万 m^3 の土砂が亀の浦・里両部落に流れ込み、32戸の住家を一瞬のうちに押しつぶしている。山津波の発生が午前4時ごろであったため人的被害は大きかった。鹿島―大浦間の鉄道、国道、通信網が寸断され現地の情報がつかめず心配されたが、大村の自衛隊100名が諫早より海岸沿いに北上、また久留米第四特科聯隊が住の江より海路出勤午後5時ごろやっと救助の手がさしのべられた。また鹿島市は塩田川・中川・鹿島川がほとんど寸断の形で決壊し鹿島市を水浸しにし16戸が流失、1人死亡、6人行方不明を出し、嬉野町では20戸が全半壊、3戸流失、3人死亡行方不明2人を出しておる以上

は集中豪雨がいかに大きな被害をもたらしたかその概要を記したまででありこれを各地区別に表せば下記のとおりとなり集中豪雨の恐ろしさを改めて再認識せざるにはおられない。

太良町大浦地区：亀の浦・里両部落の3か所に山津波が発生死者28人・行方不明12人重傷19人を出した。とくに亀の浦部落は死者22人・行方不明12人・重症19人を出し、住宅全半壊63戸、同部落の8割が被災するという惨状をみせている。（略）

鹿島市：鹿島市は市街地の中央を流れる中川・鹿島川と、両脇から抱くように流れる塩田川と浜川の堤防が寸断されたため全市水浸しになった。とくに市の中心部は濁流が軒を洗い、この水が鹿島川の堤防を越えるほどの勢いで、さらに塩田川の濁流が加わり鹿島一帯は8日朝8時ごろから孤立状態となった。（略）午後6時までに鹿島災害対策本部に入った被害報告によると、塩田町で行方不明13人をはじめに、市内で死亡2・行方不明2・重症3人・床上浸水

1500戸・床下浸水2000戸のかつてない大災害となった。なお、北鹿島の浸水と中川橋流失のため佐賀・長崎方面との連絡は困難を極め連絡が付き次第に被害は更に増大するものと思われる。

嬉野地区：同町で調べた結果によると死亡5人・家屋全壊14戸・流失した橋12か所・埋没水田100ha 特に嬉野川の護岸はズタズタになっており県道の決壊で大野原地区は孤立し復旧の見込みはたっていない。また温泉公園にかかっていた有名な赤橋も流失した。被害総額は約10億円にのぼっている。

相知地区：松浦川は8日朝相知町流域ではんらん、国鉄唐津線と、筑肥線は線路が水没したため不通となり、二級国道・佐賀―西唐津線も4kmにわたって



災害復興之碑（鹿島市母ヶ浦）

ズタズタになった。また、同町内では床上浸水53戸・床下浸水125戸を出し一時孤立状態となった。相知では、7日夜から8日朝にかけて120mmの降雨があり上記の被害となった。

小城・多久地区：8日午前5時50分牛津川は妙見橋で最高水位5.2mを記録、牛津川をはじめ市内河川堤防24か所が決壊、各地で水浸しとなり床上浸水96戸・床下浸水139戸を出した。濁水のため東多久1区20戸・同羽佐間50戸・同船津4戸が孤立となった。

武雄市：8日未明潮見川堤防が各所で決壊橋・朝日両町およそ500haが泥海と化した。さらに武雄川のはんらんで市の目抜通り松原一帯も床上浸水したほか大半が床下浸水し、去る28年の大災害以

来の災害となった。国鉄佐世保線は線路が永尾付近で洗い流されて不通となり各バス会社も運転を全く中止した。」とのことである。（佐賀県災異誌）

13 昭和38年（1963）水害

○昭和38年6月30日

「佐賀県災異誌」によれば、28日に発生した黄海の低気圧はゆっくり東北東に進み、29日夜には朝鮮北部を横切って元山沖に出た。このころから低気圧の後面にある寒冷前線が急速に南下しはじめ、29日夜半には対馬海峡にかかり、30日未明には九州北岸に達した。このため県の北部では29日夜から、県の東部および南部では30日の朝から雷を伴った豪雨が降りはじめた。とくに県北部の三瀬・古湯地区では1時間雨量80～110mmというようなものすごい集中豪雨となり、30日装用より山地崩壊がけくずれが各所に発生し甚大な被害をもたらした。今回の集中豪雨の特徴は、きわめて狭い地域に、長時

間にわたって集中して降ったことであり、28年の水害時における豪雨とはずいぶん異なった降り方をしていると記されている。



災害復旧記念碑（佐賀市三瀬）

このときの状況について「三瀬村史」(S50, 3, 30)によれば、「昭和三十八年六月三十日、三瀬、富士町北部、脊振地区の狭い範囲に長時間にわたり物凄い集中豪雨があり、三瀬村は死者三名を含むかつてみない損害を受けた。沛然と降り注ぐ雨のため、村内主要河川は急激に増水、各谷々は川と化し、村民は橋が流れ、田は流失し、山は崩壊するという惨状を目前にしながら、自然の猛威の前に手のほどこしようもなく呆然自失に有様であった。雨が止み、川は減水し、被害程度を一見した村民の目に映ったものは、今までの美田が石と砂の河原と化し、いたる所黄色の地肌をむきだしにした山崩れのあと、道路を塞いだ土塊の山、等々であらためて被害の大きさに

驚いたものであった。」と伝えている。この豪雨による嘉瀬川流域の関係市町村の被害は、死者13名、重軽傷者12名、家屋の流失及び全半壊115戸、床上、床下浸水1,274戸にのぼった。(国土交通省 河川整備基本方針より)

14 昭和42年(1967年)7月水害

○昭和42年7月8日～9日

「佐賀県災異誌」によれば、7月8日朝から梅雨前線の活動が活発となって、9日9時までに県下はすでに100mmに近い雨が降っていた。9日昼過ぎ、台風7号の衰弱した低気圧が九州北部沿岸を通過し梅雨前線を刺激して、県西部を中心に集中豪雨が降り、1時間雨量125mmに達する所もあって、大水害となった。なお、気象庁では、この豪雨を昭和42年豪雨と称した。

集中豪雨は、雨量分布図に示すとおり、県西部の有田、伊万里地方と県中部の天山山系に集中し、特徴としては、有田地方は、山くずれ、ガケくずれによる被害がめだち、家屋の全壊、流失は44戸におよび死者は12名であった。伊万里地方は伊万里川お



写真：国土交通省武雄河川事務所



大水害復旧記念碑（伊万里市松浦町）

よび有田川の決壊、はんらんによるもので、家屋の浸水5,067戸および水田の流失、埋没985ha、死者5名、家屋および水田被害がめだっている。小城郡三日月村は、天山山系の豪雨により祇園川の堤防が決壊し、そのはんらんによって水田の冠水474ha、床下浸水402戸で、死者はなく水田の被害がめだっている。国鉄関係では、佐世保線、松浦線、筑肥線が道床流失や土砂くずれで不通となり、佐世保線は12日開通したが、松浦、筑肥線は12日現在も不通となっている。

（降水量 8日～9日計 ※一部抜粋）

佐賀 164mm 古湯 218mm 伊万里（雨量計流失）

武雄 273mm 天山 262mm 有田 331mm

（各地の1時間降水量の最大値 ※一部抜粋） 佐賀 54mm 有田 97mm
 北方 84mm 天山 125mm （被害）県警本部調べによる被害（7月15日12時現在） 死者33人、行方不明1人、負傷42人、住家全壊66戸、半壊135戸、流失30戸 床上浸水7,488戸、床下浸水15,424戸、一部破損325戸、非住家被害204戸、水田流失・埋没1,054ha、冠水8,961ha、畑流失・埋没155ha、冠水366ha、橋流失150か所、堤防決壊328か所、山、ガケくずれ398か所、鉄道被害40か所、通信施設被害2,669回線（以下略）（佐賀県災異誌）

15 昭和51年（1976年）台風17号 水害

○昭和51年9月12日～13日

「佐賀県災異誌」（一部抜粋）によれば、9月4日グアム島南東海上に発生した台風17号は、ゆっくり北西進しながら発達し、8日南大東島南方で910ミリバールまで深まって非常に強い台風となった。台風は10日夜、奄美大島付近を通過するまで順調に北上したが、その後足踏み状態を続けた。12日午後に至って、やや加速しつつ、再び北上を始め、13日午前1時40分頃長崎市付近に上陸した後、3～5時に中心気圧965～970ミリバールの大型、並みの勢力を保ったまま佐賀県の嬉野→武雄→七山（唐津東方）付近を縦断し、玄界灘に抜けた。佐賀では、13日午前3時36分に最低気圧971.6ミリバールを観測した。この間、佐賀における最大瞬間風速はSE, 31.1m/s（13日午前3時5分）を記録している。総雨量は、南部の多良岳付近で300ミリに達し、北部の天山山麓でも200ミリを越えたところがあった。また、佐賀・白石両平野は100～150ミリとかなり多かったが、西部の唐津・

伊万里方面は100ミリ以下にとどまった。1時間降水量をみると、午前1～2時に岩屋川内ダム（嬉野町・県）で106ミリ、嬉野で65mmのほか、佐賀でも午前2時～3時に62ミリ（9月では第2位）を観測した。9月としては記録的な豪雨といえる。

（被害状況）台風17号は13日午前3時頃県の南西部を斜断して玄界灘にぬけた。最大瞬間風速31.1mの暴風雨の直撃で、なかでも多良岳山系では時間雨量100ミリ前後の瞬間的なドカ雨豪雨となり、鉄砲水となって山すそになだれ込み、鹿島市中川や鹿島川、塩田町の塩田川がはんらん、濁流は堤防をえぐり、家を、橋をのみ込み、市街地や町並みを水びたしにした。そのほか県南西部を中心とした各地で、住家への浸水、水田等の流失・埋没、地すべり、ガケ崩れ、道路・河川の崩壊、決壊等が相次ぎ、特に海岸地区では潮風害による水稻等の被害が大きく、また山間部では、高冷地野菜や果樹等が大打撃を受けた。



立岩谷大水害之碑（嬉野市下不動）

鹿島市では、堤防の決壊が相次ぎ、同市能古見・三河内地区で住家が6戸流失、2戸が半壊したのをはじめ、その他13戸が半壊、住家の床上浸水652戸、床下浸水2,030戸と同市中心部は水びたしとなり、午前1時半過ぎ約44戸に避難命令が出され、市民の多くが学校など20カ所に避難した。また中川に架かる広瀬橋など7カ所の橋が流され、道路が各所で寸断された。

塩田町では、町の中央部を流れる塩田川堤防が長さ40mにわたって決壊、町中心部は軒下まで濁流につかり、304戸が床下浸水した。町は午前2時40分に避難命令を出し、住民約2千人を小学校など4カ所に避難させた。

そのほか全半壊や床上床下浸水等の住家被害は県下21市町村に及び、被害戸数は6,369戸にものぼった。（佐賀県災異誌）

16 昭和55年（1980年）水害（通称：牛津大水害）

○昭和55年8月28日～31日

8月28日から31日にかけて九州北部地方は、太平洋高気圧の周辺部にあたり、また台風12号の間接的な影響もあって、大気が非常に不安定となり、前線が九州北部から中部にかけて停滞した。

8月28日夜から前線の活動が活発になり、県下全域で雷を伴った強い雨が断続的に降り、28日の降り始めから29日午前9時までの降水量は150～200ミリところによっては200ミリを超え、とくに嬉野では29日午前0

時から1時までの1時間に50ミリの強い雨を観測した。29日昼頃からいったん小降りになったものの、同日午後4時頃から、全域で再び大雨となり、伊万里では29日午後6時から7時の1時間に44ミリ、多良岳では30日午前1時から2時までの1時間に56ミリまた唐津市枝去木では同日午前9時から10時までの1時間に43ミリの強い雨を観測し、26日の降り始めから30日午前11時までの降水量はところにより500ミリを超えた。30日の昼頃には雨もまた小降りとなったが、台風第12号くずれの低気圧が30日の夜半頃から31日の朝にかけて九州北岸を通過したため、再び前線の活動が活発となり、嬉野では31日午前6時から7時までの1時間に36ミリの強い雨を観測した。その後前線はゆっくり南下し始め、同日夜には、九州南岸に達したため、午後には県下全域とも雨はやんだ。この豪雨による総降水量は、県下全域で400～500ミリところにより568ミリにも達し、県下に重大な災害をもたらした（中略）。

また牛津川堤防決壊修復作業及び牛津町内の防疫作業のため、陸上自衛隊に災害派遣要請がなされ、その作業は9月2日まで続いた。

これらの被害は、農林業被害、土木被害を中心に総額約325億もの多額に達した。

主な被害状況

（ア）牛津川堤防決壊

30日午前1時20分頃牛津川左岸の2カ所がほぼ同時に決壊、濁流は未明の牛津町をみるみるのみ込んだ。昼前にはさらに2カ所が決壊し、1カ所で漏水し、705戸が床上浸水、726戸が床下浸水してほぼ全町が孤立した。

動脈の国鉄長崎本線、国道34号をはじめ交通網はズタズタ、町は終日孤立した。し、町中心部の新町、江津では水深が2mと軒先まで達し、住民は2階にあがって救援を待った。県警機動隊や小城地区消防本部等が船艇やゴムボートで住民の救助活動にあたった。

（イ）唐津市佐志南の山崩れ（ミカン山）

30日午前11時半過ぎ頃、農業熊本今朝雄方裏のミカン山が突然土石流と



S55.8 前線 六角川上流

写真：国土交通省武雄河川事務所



S55.8 前線 牛津川中流

写真：国土交通省武雄河川事務所

ともに崩れ落ち、住家の一部を壊し、さらに下方の住家１棟を押しつぶした。このため、押し寄せた土砂と住家の下敷きで、老人１人が生き埋めとなり遺体で発見された。流れ落ちた土石流は幅約３０ｍ長さ約１００ｍにも及んだ。

（ウ）鳥栖市柚比町のため池決壊

３０日午後０時４５分頃鳥栖市柚比町の安永田ため池の堤防兼市道が幅４ｍ、長さ３０ｍにわたって決壊、約１５万トンの水が流れ出て、床上浸水１戸、床下浸水４戸、水田８ｈａが冠水した。幸い人命に被害はなかった。



安永田溜池記念碑（鳥栖市柚比町）

（エ）伊万里市東山代町ボタ山崩れ

３０日午前８時頃伊万里市東山代町大久保地区でボタ山が長さ２００ｍ、幅３０ｍにわたって崩れ、またすぐ東側の同町福住地区でも長さ１５０ｍ、幅５０ｍにわたって山の土砂くずれがあり、農地や農道が埋没した。このため、両地区３８世帯１２２名が公民館等に避難した。ボタ山崩壊による被害はこの伊万里市二里町や多久市でも発生した。

（県内の被害状況） 被害総額 ３２，４６７，５６３千円

人的被害（死者４人、重軽傷者８人） 家屋被害 ６０１，９１１千円

（家屋全壊１４戸 半壊・一部損壊５０戸 床上浸水３，００６戸

床下浸水１６，９６５戸 土木被害 ８，２３５，３５２千円 農林業被害

２０，４２４，９６６千円 水産被害 ９２，４８３千円

学校関係被害 ６０，３７５千円 経済関係被害 ３，０１０，７１１千円

厚生関係被害 ３３，２１４千円 その他 ８，４９１千円（佐賀県災異誌）

１７ 平成２年（１９９０年）水害

○平成２年６月２８日～７月３日

朝鮮半島に停滞していた梅雨前線は６月２８日に九州北岸まで南下し、このあと７月３日まで九州付近に停滞した。九州付近では、太平洋高気圧の周辺部から梅雨前線に向かって暖かい湿った空気が流入し、梅雨前線の活動が活発となった。このため、九州各地で局地的に強い雨が降った。

特に７月２日には、低気圧が前線上を東進し０９時には対馬海峡付近に達した。このため梅雨前線の活動が非常に活発となって、九州北部地方全域で大雨が降った。

県内では、２日の午前３時頃から記録的な大雨になった。同日の佐賀地方気象台での日降水量２８５．５ｍｍは昭和２８年６月２５日の３６６．５ｍｍに次いで第２位（７月としては第１位）の記録となり、また最大１時間降水量７２ｍｍ

(05時35分から06時35分)は観測史上第3位(7月としては第2位)であった。



H2. 7 梅雨前線 六角川中流(北方)

写真：国土交通省武雄河川事務所

28日23時頃から降り始めた雨は29日9時頃より小康状態となり、30日02時頃より県下全域の中小河川の水位は徐々に上昇し、2日明朝には警戒水位を上回る水位となり、いたる所で越水し破堤した。特に晴気川の門前橋上流の左岸では2日4時35分警戒水位を超え、07時には堤防高4.00mを超える水位となり、越水し堤内側を侵食し始め、9時50分破堤した。また、牛津川など他の河川の越水等も重なり、下流域の牛津町では町全体の8割が浸水した。県全体ではいたる所で河川堤防の破堤、決壊が起こり、起水と内水で県の平坦部面積の半分以上が浸水した。

また、県南部及び中央部を中心として山地に起因する災害(林地の崩壊、土石流)が多発し大きな被害をもたらした。鹿島市三河内地区では山腹崩壊による土石流により1人が死亡、1人が重傷を負い多久市東多久町では1人が水路に落ち死亡した。

また、県南部及び中央部を中心として山地に起因する災害(林地の崩壊、土石流)が多発し大きな被害をもたらした。鹿島市三河内地区では山腹崩壊による土石流により1人が死亡、1人が重傷を負い多久市東多久町では1人が水路に落ち死亡した。

(被害) 被害総額 59,035,605千円

人的被害 死者2人 重軽傷者 15人

住家被害 全壊14戸

半壊・一部損壊93戸

床上浸水4,635戸

床下浸水 21,113戸

土木被害 16,903,808千円

農業被害 23,981,880千円

(流失・埋没 田512ha 畑294.7ha)

林業被害 5,996,667千円

水産被害 282,374千円

商工被害 11,353,420千円

その他 135,352千円



H2. 7 梅雨前線 牛津川中流(牛津)

写真：国土交通省武雄河川事務所

学校被害 265,322千円

厚生被害 114,782千円

(佐賀県災異誌)

18 平成17年(2005)福岡県西方沖地震

○平成17年3月20日 本震

平成17年3月20日に起きた福岡県西方沖地震は、これまで大きな地震をほとんど経験したことのない佐賀県民を驚かせた。この地震について「佐賀県災異誌」には次のように記されている。

平成17年3月20日10時53分頃、福岡県西方沖（福岡県福岡市玄海島付近）の深さ9km付近を震源とするM7.0の地震が発生し、福岡県福岡市の東区、中央区、前原市及び佐賀県みやき町で最大震度6弱の揺れを観測したほか、九州北部を中心に関東地方の一部から九州南部にかけて震度5強から1の揺れを観測した。このため県内では、土木被害、農業被害、林業被害、水産被害、文教被害及び商工被害が発生した。（佐賀県災異誌）



本震で倒壊した鳥居（鳥栖市原町 菅原神社）

なお、県内各地の震度は、みやき町北茂安（震度6弱）、七山村滝川、上峰町坊所、白石町有明（震度5強）、唐津市西城内、唐津市呼子、鳥栖市宿町、多久市北多久町、諸富町諸富津、川副町鹿江、三瀬村三瀬、江北町山口、嬉野町嬉野町役場、小城市牛津（震度5弱）など県内ほとんどの範囲で揺れを観測している。このときの被害は、被害総額298,031千円、人的被害（軽傷14人）、住宅被害（半壊1棟、一部損壊136棟）などとなっている。

○平成17年4月20日 最大余震

平成17年4月20日06時11分頃、福岡県西方沖の深さ14km付近を震源とするM5.8の最大余震が発生し、



余震で倒壊した鳥居（白石町廿治 吉村天満宮）

福岡県福岡市の中央区、博多区、早良区、南区、前原市、新宮氏で最大震度5強の揺れを観測、佐賀県内ではみやき町北茂安、久保田町新田で震度5弱の揺れを観測したほか、九州北部を中心に西日本の広い範囲で震度4から1の揺れを観測した。（佐賀県災異誌）

なお、このときの県各地の震度は、久保多町新田、みやき町北茂安（震度5弱）、唐津市浜玉、七山村滝川、佐賀市駅前中央、鳥栖市宿町、白石町福田、小城市芦刈（震度4）などとなっている。

19 平成18年(2006)台風13号及び秋雨前線水害

○平成18年9月16日～18日

ア 概況

平成18年9月10日21時にフィリピンの東海上で発生した台風13号は、太平洋高気圧の南の縁に沿って発達しながら西に進み、15日からは北寄りに向きを変え、16日早朝に石垣島付近を通過し東シナ海を北上した。

同時期、九州南部にあった前線が北上して対馬海峡に停滞し、台風からの湿った暖かい空気が流れ込み前線の活動が活発となった。このため、佐賀県北部では9月16日か明け方から昼前にかけて記録的な大雨となり、唐津市や伊万里市では土砂災害が発生した。

また、河川の水位が上昇したため、徳須恵川に洪水警報を、嘉瀬川、牛津川に洪水注意報を発表した。

その後、台風13号は、東シナ海を北上して17日18時過ぎに長崎県佐世保市付近に上陸した。上陸時の勢力は「強い台風」で、中心の気圧は950ヘクトパスカル、中心付近の最大風速は40メートルで、上陸後も強い勢力を保ったまま佐賀県、福岡県を通過して20時頃玄界灘へ抜け、日本海へと進んだ。

今年九州に上陸した台風は第10号に続いて2個目で、佐賀県を通過した台風としては、平成17年9月の台風14号以来となった。

イ 暴風

佐賀県は平成18年9月17日昼前(10時頃)2風速15メートル以上の強風域に入り、17日昼過ぎ(14時頃)から夕方(17時頃)にかけて、ほぼ全域が風速25メートル以上の暴風域に入った。佐賀で18時50分に南南



写真：国土交通省武雄河川事務所



写真：国土交通省武雄河川事務所

東の風50.3メートルの最大瞬間風速を観測、観測開始以来第3位の記録となった。

また、18時50分に川副で南南東の風35メートル、19時00分に佐賀で南南東に風28.6メートルの最大瞬間風速を観測した。

佐賀県は18日00時頃暴風域を抜け、05時ごろには強風域から抜けた。

ウ 大雨

アメダスの観測によると佐賀県北部では、前線の活動が活発となり、16日明け方前から昼前にかけて局地的な50ミリ以上の激しい雨が降った。特に、伊万里では10時10分までの1時間に99ミリ、枝去木で06時20分までの1時間に89ミリの猛烈な雨を観測し、それぞれ日最大1時間降水量の極値を更新した。

17日は、台風をとりまく雨雲が断続的に流れ込み、県内は、昼過ぎから宵のうちに掛けて台風の北側の強い雨雲が流れ込み、枝去木で19時10分までの1時間に77ミリの非常に激しい雨を観測した。15日から18日までの総降水量は、伊万里402ミリ、枝去木326ミリ和多田268ミリ、嬉野132ミリ、八幡岳191ミリ、佐賀市124.5ミリなど、北部を中心に大雨となった。（佐賀県災異誌）



当時の水深 2.9m（伊万里市南波多水留）

20 令和元年（2019）8月の前線に伴う大雨（通称=佐賀豪雨）

○令和元年8月27日～30日

8月27日朝、九州南部付近にあった前線が対馬海峡付近まで北上し、前線に向かい温かく湿った空気が流れ込んだため、大気の状態が非常に不安定となり、本県に記録的な大雨をもたらした。このため、27日夜の初め頃から28日明け方にかけて气象台から、県内各地に記録的短時間大雨情報や大雨特別警報が発表された。この一連の大雨で、1時間降水量（佐賀市 110.0 ㎜を含む 2



JR 高橋駅前の実績浸水深

地点）、3時間降水量（白石 245.0 ㎜を含む 2 地点）、6時間降水雨量（白石 279.0 ㎜を含む 2 地点）、12時間降水雨量（佐賀 294.5 ㎜）、24時間降水雨量（佐賀 390.0 ㎜を含む 2 地点）、48時間降水雨量（佐賀 430.5 ㎜を含む 2 地点）、72時間降水雨量（佐賀 461.0 ㎜）と、観測史上1位の値となった。

また、この大雨により、死者3名、重症3名の人的被害と、住宅全壊87棟、

半壊866棟、床上浸水773棟、床下浸水4,310棟など大きな被害が発生し、被害総額は33,259,882千円にのぼった。（佐賀県「平成31年・令和元年災害の概要」より）

21 令和3年(2021)8月の大雨

○令和3年8月11日～19日

8月11日から19日にかけて日本付近に前線が停滞し、あたかも梅雨末期のような長雨が続き、西日本から東日本の広い範囲で大雨となった。特に8月14日には、九州北部地方に線状降水帯が発生。激しい雨が降り続いた。また嬉野市では24時間降水量555.5ミリを観測し、観測史上1位の値を更新した。このため気象台は14日、佐賀県、長崎県、福岡県に大雨特別警報を発表した。佐賀県のまとめによると、この大雨で、住宅等の被害3,586棟、道路の決壊や崩壊190ヵ所、河川堤防や護岸の決壊219ヵ所などの被害が発生した。特に武雄市、



神崎市三谷地区の土石流現場に建てられた「鎮魂碑」

大町町など六角川流域は、平成元年の佐賀豪雨災害からわずか2年後に再び広い範囲で浸水被害に見舞われた。しかも今回の大雨による浸水深は令和元年のそれを上回っている。このため武雄市内の住宅等の被害は、令和元年の佐賀豪雨の際の1,296棟を上回る1,411棟と県内で最も多くなった。

このほか嬉野市では不動山地区で地すべりが発生、また神崎市三谷地区では土石流災害が発生するなど県内各地で大きな被害が発生した。



武雄市橘町片白

令和3年の浸水深は、約2メートルで、令和元年に比べ90センチほど高い